

3月

資料紹介

『重訂本草綱目啓蒙』と『本草綱目啓蒙図譜』

盆栽を育んだ文化の一つに、江戸の園芸があります。当館では、江戸の園芸文化の研究のため、令和6年度(2024)に、関わりが深い本草書『重訂本草綱目啓蒙』と『本草綱目啓蒙図譜』を新たに収録しました。

そもそも「本草」とは、薬用となる動植物等を指し、それを学問としたものを本草学と呼びます。多種多様な動植物等を対象とするため、やがて本草学は博物

学的傾向を持つことになり、その出版物である本草書は現在の百科事典のような内容となります。

『本草綱目啓蒙』は、中国明代の李時珍が著した『本草綱目』を基に、本草学者の小野蘭山が江戸で講義した内容を孫の職孝(もとたか)が整理・編集し、刊行したものです。当館が収録する『重訂本草綱目啓蒙』は、弘化4年(1847)に刊行された第4版にあたります。48巻20冊から成り、鉱物、植物、動物に分けて紹介されています。本書に図版はありませんが、嘉永2年(1849)、山草すなわち植物の部分のみを取り上げて図示した『本草綱目啓蒙図譜』が刊行されました。

『本草綱目啓蒙』は、和名だけでなく、方言も多く収録されていることで知られています。例えば、升麻(しょうま)の場合は、和名「トリノアシグサ」(延喜式)と「ウタカグサ」(和名類聚鈔)、肥後の方言「ミスフデ」や越後の「イハダラ」等が記されています。また、『本草綱目』の

単なる翻訳ではなく、蘭山の知見や経験が盛り込まれた百科事典的な名著と言われており、説明も平易な点が特徴です。

例えば、升麻の場合、「春宿根ヨリ新葉ヲ叢生(そうせい)ス、凡三枝九葉ヲ一葉トス、(中略)其一葉ヲ離セバ、地錦葉ノ形ノ如シ、厚クシテ光沢アリ、茎八細ク硬ク光アリテ、粟ノ稗(しべ)ノ如シ」と一般的な特徴を挙げ、続いて「日光升麻ノ葉ハ狭窄(きょうさく)ニシテ、苗高サ五六尺ニ至リ、枝ヲ分チテ花ヲ開ク」など、産地別や品種別の特徴が詳細に記されています。これらの記述や『本草綱目啓蒙図譜』の挿図とあわせて、当時の植物の品種や人々の知見を知ることができます。

両書は同時代史料を紐解く際の事典として活用できるだけでなく、盆栽のベールにある園芸文化史の一端を知ることが出来る史料です。今後も、史料収集と研究を行い、展示等でその成果を発表していきますので、ご期待ください。

(当館主任 立石見雪)



『本草綱目啓蒙図譜』巻之九 山草 下之上